

泣き方の表現に見られる性差 ―小説における日本語とロシア語の比較から―

宿利由希子, カリュジノワ・マリーナ

本研究は、一般的に女性性と結びつけられる「泣く」という行為 (Frey, W. H. II, and Langseth, M. 1985 *Crying: The Mystery of Tears*. Winston Pr [フレイ, W. H. II, & ランセス, M. (著) 石井清子 (1990 訳) 『涙―人はなぜ泣くのか』日本教文社.]) に着目し、日本語の泣き方の表現においても性別とのつながりが強く見られることを、ロシア語との比較を通して示すこととする。調査では、ロシア文学『片恋』のロシア語原文版と日本語訳版、および日本文学『或る女』の日本語原文とロシア語訳版に使用されている泣き方の表現をすべて抜き出し、泣く主体の性別と使用される表現の関係を観察した。

その結果、泣き方の表現の種類の多寡について、日本語の方がロシア語に比べ泣き方の表現の種類が多いことがわかった。さらに泣き方の表現の人物汎用性について、以下の3点が明らかになった。(1) 日本語でもロシア語でも「泣く (плакать, plakat')」「涙 (слёзы, slyozy)」「涙ながらに (со слезами, so slezami)」は一般的な泣き方であり、主体の性別と関係なく使われる。(2) 日本語では特に女性の泣き方としてオノマトペが多用されるが、ロシア語では主体の性差と関係なく泣き方の状態やその激しさに違いが見られ、オノマトペはどちらの性にも使われない。(3) 「すすり泣く (всхлипывать, vshlipvat')」は日本語でもロシア語でも泣く主体が女性性に偏っており、両言語社会において女性に特化した行為と考えられている可能性が示されたが、日本語版において「涙ぐむ」が男性性に偏る一方、ロシア語版で男性性に偏る表現は見られなかった。(2) および(3) から、日本語の方が泣き方と性別との結びつきが強いことが示されたと言える。